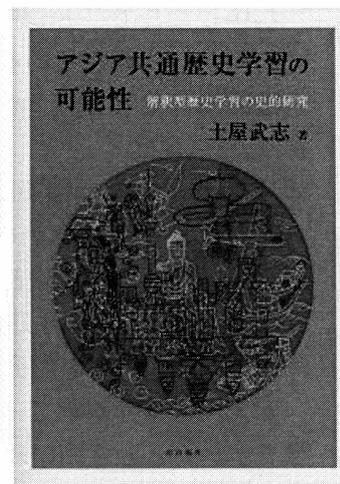


書評

土屋武志 『アジア共通歴史学習の可能性 — 解釈型歴史学習の史的研究』

(梓出版社 2013年11月20日第1刷発行)

ISBN978-4-87262-640-7



土屋武志さんは2012年に博士論文「解釈型歴史学習の史的展開—学習方法をめぐる変遷・転換過程の批判的検討」を兵庫教育大学に提出され、学位を獲得された。さらにその論文を、タイトルの変更と、それにとまなう若干の内容上の修正を経て、出版なされた。それが本書である。

最初、同書を手にしたとき2つの思いが頭に浮かんだ。1つは、学位論文だからきっと難解な本なのだろうという漠然としたイメージである。もう1つはどうしてタイトルを「アジア共通歴史学習の可能性」になされたのだろうかという疑問である。もとの学位論文のタイトルから大きく変化しているからである。しかし読み進めるうちに、前者のイメージはすぐに消えてしまった。それどころか、ハイレベルの専門書であることは確かだが、とても読みやすく、さらにためにもなるという意見が変わった。

それにたいして後者の疑問が解決したのは、一人の院生がワークシートに書いてくれた文章によってである。それは次のような経緯である。

最近、評者もまた学生に毎授業、その日の授業内容に関連した意見や感想を書いてもらっている。すると、鋭い記述に出会うことがある。教員が学生に教えられることは珍しくない。たまたま先日、ある院生が提出してくれたワークシートに、次のような一文を見つけた。

「解釈型の学習を実質的に進めるためには、間違いなく学習者一人ひとりが尊重されていることが前提となる。」

学生や院生のもつ力は侮れない。愛教大で最も多くの数の院生と留学生を指導なされているのは土屋さんである。院生や留学生にそれほど慕われ、尊敬されるのは、あくまで土屋さんの人柄、性格に起因すると思っていた。しかし上述の院生の意見を読むことで、評者は土さんの社会科教育の理論にも依っていることを知ったのである。

土屋さんは、院生に慕われる。出身国に関係なく、すべての留学生に尊敬されている。どうしてそうなのか。答えは簡単である。土屋さんが日常生活においてのみならず、日々の授業のなかでも学生、留学生の人格と人間性を尊重し、いかなる他者にも対等平等に接することができるからである。そのような土屋さんが「解釈型」歴史学習について学位論文としてまとめられたことは、ある意味、必然的である。

解釈型歴史学習は、教師が教えこむ歴史教育とは大きく異なる。子どもがひたすら暗記する歴史学習とも、あるいはもっぱら子どもの追究活動に頼る歴史の授業とも異質である。解釈型歴史学習では、その学習に参加するすべての人は対等平等に、自由に意見表明できる。それぞれの解釈は等しく尊重される。だからこそ、アジア共通学習の可能性があると

言いきれるのであろう。

しかしここでひとつの重要な疑念が生じるかもしれない。土屋さんは相対主義者ではないのかという疑念である。もちろん土屋さんは相対主義者ではない。真理の存在を否定する懐疑論者でもない。そのことを、同書の内容から特に 2 点に言及することで明らかにしよう。

1) 土屋さんは懐疑論者でないことの証明：その 1

同書の特に第 1 章から第 6 章までの歴史研究的叙述を読むことは、現在のわが国の社会科教育、とりわけ歴史教育を取り巻く状況を考えるうえで、とても参考になる。たとえば土屋さんは 1933 年 8 月に開かれた公民教育夏期講習会での東京女子高等師範学校教授、内藤智秀の講演内容を紹介している。

五・一五事件が起こったとき、ある小学校の先生が、子どもの「犬養さんを殺したのは誰ですか」という問いに、「犬養さんを殺したのは、アメリカの軍人だ」と答えた。内藤はそのことに共感して、歴史家は怒るかもしれないが、「歴史教育から云うと、そこに多くを考えさせるものがある。…純な子どもの頭に日本の軍人がそんなことをするとは教えられない」と述べる。

土屋さんはそこに、当時の高等師範学校教授の歴史教育観が典型的に現れているとし、次のように鋭く批判する。「ここで彼の言う『教育』とは、自国で起きた不名誉な事件は、子どもの立場に立つと教えることができないとするもので、現実を理解する眼を覆ってまで一定の価値を注入しようとするものだった。」

内藤教授のあまりにも滑稽な歴史教育観を、しかし現代のわたしたちは、過去の一時的エピソードでしかないとして見過ごすことはできない。むしろ自虐史観批判と称して声高にショービニズム教育を推進するグループの主張と論理のなかに、本質的に同一のものがみられるからである。

2) 土屋さんは懐疑論者でないことの証明：その 2

もちろん同書の歴史研究の部分だけが価値豊かというわけではない。土屋さんが地道に成果を蓄積なさってきたイギリスの社会科教育に関する記述も重要である。同書の第 8 章では「イギリスの歴史学習における歴史家体験活動」という実践が具体的に説明されている。そこでは「歴史家たちは同じ資料に基づきながら、どのようにして異なる説を生み出すのか？」という、サブテーマを持つ单元についても言及されている。その单元では、生徒たちは、歴史家が異なる解釈を立てるプロセスを考察するのである。すなわち生徒たちは資料読解（情報評価）を軸とする活動と歴史表現（情報構成）を軸とする活動の 2 つの活動を丁寧に繰り返すことで、「真理」に迫っていくのである。それによって明らかな誤謬や歪曲、あるいは現代日本の基本である平和や民主主義を否定する解釈は決して生じえないのである。

☆

繰り返すが、本書は学位論文がもとになっている理論的レベルの高い著書とはいえ、実に読みやすく、教育実践にとっても教訓的である。教育研究者はもちろん、学生や院生、そして小中高の社会科系教科の担当教員、さらには歴史学者にとっても必読書であると考えられる。

(愛知教育大学社会科教育講座 船尾日出志)